

序

めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲隠れにし夜半の月かな

『紫式部集』巻頭歌にして、『百人一首』にも採録された、紫式部の代表歌である。本書は、紫式部の生涯に関する考証論攷と『源氏物語』の曆象で構成した。タイトル「みしやそれとも」は、本書において足掛け三十年に渡る考証の限りを尽くしても、なお、紫式部の実像にどこまで迫れたのかというわたくしの感慨そのものである。

今年二〇二四年は、大河ドラマ「光る君へ」によって、『源氏物語』千年紀以来の出版ブーム、紫式部関連本が書架に溢れている感がある。ただし、注目していた紫式部の伝記に関する新見解は見あたらず、むしろ、明らかに誤りと思われる旧説が踏襲されていた。例えば、紫式部の没年を二〇一四年とするのは、小野宮（藤原）実資の日記『小右記』長和二年（二〇一四）五月二十五日条に「『越後守為時女』なる女房が以前から雑事の取り次ぎ役であると記されることを根拠とする。しかし、それ以降も『小右記』には「相逢女房」なる常套表現が再三見られるから、一〇一四年没年説はその検証すら怠っているのである。

また、紫式部の本名に関しても一説として「藤原香子」説に触れるものもあるが、「議論がある」「今は否定されている」といった常套句で独自に検証したり、論破したものはなかった。はては、紫式部は叙爵されていないから、名前は与えられなかったとする極論が何度かネット記事として配信されたこともあった。第一部「諸説総覧 紫式部伝」に同僚女房を総覧したが、叙爵された記録がなくとも、多くの女房の氏名出自が判明している。

例えば、藤原実資の娘の幼名はかぐや姫（『大鏡』）、長じて千古（寛仁三年（一〇一九）十二月九日条）。女房として働いていたことは『小右記』では確認できない。また、紫式部は私的に採用された女房であるから、これまた名前がなかったとする説もあるが、道長の後宮政策重点化により、公私の採用区別なく、もれなく公的存在で俸禄も賄われていたとする吉川真司説がある（本書第一部参照）。このように、例外がすぐに挙証されるということは、この説は誤りであることを意味する。

そんな絶望的な状況の中、わたくしにとつて嬉しい光明となる論文集も刊行された。

『歴史評論』二〇二四年一月号（第八八五号）歴史教育者協議会の特集である。

〈紫式部〉を歴史から読み解く

服藤早苗 紫式部と中宮彰子

※本書第一部初出稿を没年説として引用

伴瀬明美 紫式部の人生をたどるには

※本書第二章を生年諸説として引用

このように、史学研究者の眼にとまる拙論もあることを知り、本書の公刊を思い立った。これに、この数年書き継いできた曆象想像力の論攷と本書にかかわる掌編群を附篇として加え、一書とした。

第二章第一章「ある紫式部伝 本名・藤原香子説再評価のために」（二〇〇三年）は、角田文衛先生がたいへん喜んで下さり、『人物で読む源氏物語』（勉誠出版、二十卷、二〇〇五～二〇〇六年）として発展させ、昨年『紫式部伝 平安王朝百年を見つめた生涯』（勉誠社）として上梓した。本書の姉妹編としてお読み頂ければ幸いである。

顧みれば、本書の存在論拠の基幹となる『御堂閔白記』『小右記』『権記』の訓読をご教示賜った萩谷朴先生、黒板伸夫先生、盟友三橋正とは幽冥分つこととなって久しい。

謹んで本書を先達の御霊に捧げたい。

目次

序	i
第一部 諸説総覧 紫式部伝	1
諸説総覧 紫式部伝	3
第二部 紫式部伝 論攷編 I	81
第一章 ある紫式部伝——本名・藤原香子説再評価のために	83
はじめに	83
一 藤原香子伝の再検討 付・紀時文伝の再検討	83
二 紫式部と彼女をめぐる男たち	98
三 紫式部像の変貌	103

第二章 宇治十帖と作者・紫式部——「出家作法」揺籃期の精神史	113
はじめに	113
一 紫式部伝の前提	114
二 宇治十帖研究の課題	115
三 具平親王、源倫子と紫式部の関係	116
四 宇治十帖の成立	121
五 出家作法の正編と続編	123
六 紫式部は「臨終出家」であったか	136
第三章 紫式部の生涯——『紫式部日記』『紫式部集』との関わりにおいて	143
はじめに	143
一 紫式部の幼名は「もも」、晩春三月三日の生まれである	143
二 紫式部と「命婦」「掌侍」	147
三 内裏女房と中宮女房は、適宜、入れ替わり可能である	155
四 死に向かう人生史としての『紫式部集』	160
五 紫式部の没年月を絞り込む	162
第四章 「藤式部」亡き桃花の宴——西本願寺本兼盛集附載逸名歌集注解	179
はじめに	179
一 大原野行幸歌群	179
二 石清水臨時祭歌群	184
三 花薄歌群	191
四 桃の歌群	193
むすびに	197
第五章 『紫式部日記絵詞』人物注記の方法——日記承継者は幼少女性親族か	205
はじめに	205
一 『紫式部日記絵詞』の割注（分注）	205
二 黒川本紫日記の人物注記	214
三 叙爵に際しての人名注記	219
四 実名注記のジェンダーバイアス	220
五 現存『紫式部日記』と式子内親王月次絵	222
むすびに	225
第六章 『源氏物語』の作者・紫式部の楽才	233
はじめに——紫式部楽才の基底	233

一 問題提起——山田孝雄『源氏物語之音楽』（一九三四年）の意味……………	237
二 『源氏物語』の前史と時代背景……………	240
三 琴は礼楽思想を体现する……………	245
四 紫式部の楽才と知——『源氏物語』引用楽書一覧……………	246
五 平安時代までに請来が確認できる琴曲……………	247
むすびに——紫式部の楽才の内実……………	251

第三部 『源氏物語』と曆象想像力 論攷編Ⅱ……………

255

第一章 「入る日を返す撥こそありけれ」……………

——徳川本『源氏物語絵巻』「橋姫」巻瞥見……………

257

はじめに……………

257

一 「橋姫」巻本文の諸相……………

259

二 楽器の相承と姫君達の衣裳……………

262

三 『教訓抄』と蘭陵王……………

264

四 徳川本『源氏物語絵詞』橋姫精読……………

272

五 舞楽「陵王」と『源氏物語』の時代……………

276

むすびに——「人生の不可逆性」の物語……………

281

第二章 中世源氏学の「准用」を疑う……………

295

はじめに……………

295

一 中世源氏学の展開——『こかのしらべ』の注釈史……………

295

二 「山の端近き心地する」八宮と薫——「椎本」巻の語りと曆象想像力……………

301

三 時間軸から薫の仰角を測定する……………

304

四 注釈史を俯瞰する……………

312

むすびに……………

315

第三章 「ついたちごろのゆふづくよ」の詩学……………

319

——桃園文庫本「浮舟」巻別註と木下宗連書入本……………

319

一 前提——いわゆる大島本『源氏物語』「浮舟」巻は桃園文庫に現存する……………

319

二 書誌と傳來——木下宗連書入転写本……………

319

三 「ついたちごろのゆふづくよ」の諸問題……………

323

四 『源氏物語』の暦日表象——そして「有明けの月」……………

327

五 大島本『源氏物語』「ゆふづくよ」の詩学……………

329

むすびに……………

334

附篇

附篇Ⅰ	一 紫式部と清少納言、道綱母の家	341
	二 『源氏物語』ふたつの閨月	350
	三 望月の歌と紫式部	356
	四 黒川本『紫日記』の本文校訂史	363
	五 定家本「若紫」出現と誤伝の弊害	370
附篇Ⅱ	六 結核文学の系譜——堀辰雄『伊勢物語など』と池田亀鑑、そして紫の上	374
附篇Ⅲ	七 『夢の通ひ路物語』散逸部断簡の出現	382
初出一覧		393
跋——『源氏の物語』を伝えた人々		395
『みしやそれとも 考証——紫式部の生涯』を読むための人物誌		401
源氏物語・紫式部年表		407